

## 自著を語る

# 『家族のメタファー—ジェンダー・少子化・社会』 (早稲田大学出版部)

丸山 茂

法学研究所の出版助成金をいただいて単著を出すのは今度で2回目になる。前著『家族のレギュレーション』(御茶の水書房)を出したのが1999年であるから、その間に編著、訳書はいくつか出したものの、単著となると5年ぶりということになる。元来あまり勤勉でない私としては、そう悪くないペースとも思うが、残念なことに純粹の書き下ろしは今回皆無で、求められてフランスの家族について書き連ねたものを集めたにすぎない。

こうやって見直してみると、時代の要請であろうか、内容は大きく分けて三部に整理されることになった。なかでも女性が社会と家族をどうつないでいくかという少子化とジェンダーの箇所は大きな割合を占めている。ジェンダーの関係で言えば、私の方法的立場は、ジェンダーを「女性」差別を糾弾するために道具化する姿勢や、「家父長制」の社会構築主義の決定論の視点からは一定の距離を置き、さまざまな主体と構造との相互性を描いていくべきだという点にある。このような立場は、単純ではないので理解されにくいかもしれないけれども、誤解を恐れずに言えば、「女性」という言葉に含まれる人間的営みは全体ではあり得ないという感覚が基底にある。

私の主張のもう一つの基軸をなすものは、「近代家族」批判である。近代家族はフェミニズムによって遡上にあげられて、その「家父長制」的性格が批判された。私は、近代家族の揺らぎを明らかにしながら、近代家族が自然の性別とセクシュアリティを一致させ「モラル家族」を強いるものであること、嫡出性の原理と親子関係の排他性をその特質に加える

とともに、私生活の自由の承認がデモクラシーを作り上げる起点であることを強調している。また、家族の多様化によって「複合的親性」という概念が導入されるべきだとする主張も目新しいものであるかもしれない。

第三の世代間関係の部分では、これまで論じられることの少なかった「父」を分析するための四つの視点を明らかにするとともに、他方で、家族が個人化しているとはいえ、祖父母との関係ではむしろ自立を保ちながらの依存の関係が深まって、新しい大家族とも言うべき現象が広がっていることを指摘している。

フランスと日本の家族とでは、文料的背景を必ずしも同じくするものではないが、資本主義の高度化がもたらす家族への影響には比較的共通するものが多い。その意味で、本書で扱う問題は、変容する日本の現代家族を考える際の参考になるのではないかと願ってやまない。

ふりかえてみれば、何年か前に私の学問についてAERA MOOK『家族学のみかた』(朝日新聞社)に書かせてもらったことがあるが、そこに勢い込んで書いてしまったことのどのくらいを実現できたか忸怩たるものがないとはいえない。本書を出すことによっていささかのエクスキューズができるようになったとも思えるが、道はなお遠そうである。

(法務研究科 教授)

